

## 何かをやりとげるために必要なこと

弘前市立福村小学校

矢田谷 昇 太

ぼくは、『天と地を測った男』という本を読みました。六年生で歴史の勉強を始めてから歴史に興味があり、図書館の伝記コーナーにあった本のタイトルが目にとまりました。つかげです。

この本は、江戸時代に正確な日本地図をつくった、伊能忠敬という人について書かれた伝記です。忠敬が子どもの時代から、商人として家業を盛り立てたのち、隠居して江戸に出て天文学や測量術を学び、その後全国を測量し、最後は忠敬が亡くなった後に弟子たちが「大日本沿海輿地全図」を完成させたところまでが書かれています。

ぼくがこの本を読んで心に残ったところは、忠敬が歩いて測量をし、夜は寝る間もなく星の観測をし、その当時一番正確な地図を完成させたところです。また、幼いころの忠敬（三治郎）のことも書かれており、母を亡くしてから北の星をかあちゃんの星と思つてよく夜の星空を見上げていたこと、算法が得意であったことなどが印象的でした。

江戸に出た忠敬が天文学を学んだころは、地球は球形であることはわかっていましたが、地球の大きさはまだだれも知りませんでした。地球に基盤のような目盛をつけ、その緯度一目盛り、一度分の子午線の長さがわかれば、計算で地球の直径もわかるだろうと考え、いつかその正確な距離を求めようと志します。

幕府から蝦夷地の測量許可がおり、第一次測量に出発します。一步の長さを測り、何歩歩いたかで距離を出す歩測をはじめ、磁石で方角を測る道具、星の高度を測る道具などを使い、道線法や交会法などを用いて丁寧に測量していきます。その結果、当時の地図と比べたれどもがおよそくほど正確な地図をつくり上げました。幕府からも信頼を得た忠敬は、その後も第二次、第三次測量と、器材を改良しながら、隊員たちと次々に地図づくりをしていきます。

測量を進めるうちに、念願の緯度一度分の長さが二十八里二分であることを突き止めます。実際にその一年後、忠敬が

導き出したその距離が、西洋の最も新しい研究で報告された距離とぴつたり一致することがわかりました。

現代のようなすぐれた器材がないころに、正確な地図をつくらうと、とてつもなく長い距離を自分の足で歩き、丁寧に測量を続けたところが、とてもすごいと思いました。

大きな仕事をやりとげるためには、根気の強さが必要だと感じました。ぼくも、忠敬のように一つ一つ丁寧に積み上げ、目標に向かって最後まで根気強くがんばれるようになりたいです。